主語位置および左周辺部への移動について

廣川　貴朗

1. 導入

本発表は，近年の Chomsky の枠組み (Chomsky (2021, in press)) における主語位置の特性や，主語位置および左周辺部への移動に関する主張を再検討し，問題点を指摘する．

Chomsky (in press) は Box 理論を提案し，連続循環移動を破棄した．Chomsky は Box 理論において，フェーズを越えてフェーズの先端に移動（Internal Merge; IM）した要素は比喻的に「ボックスに入る」ことで，統語的にはアクセス不可能な, 外部システムからのアクセスは可能な状態になると主張する. この提案に基づいて，Chomsky は話題化を(1c)のように分析する：

(1)　a.　Bill, John met ___ yesterday.　(Chomsky (in press: 11))

b.　従来の連続循環移動分析

{Bill$_3$,　{C, {John, {$_{v*P}$ Bill$_2$, {met Bill$_1$ yesterday}}}}

c.　Box 理論による分析

{C, {John, {$_{v*P}$ Bill$_2$, {met Bill$_1$ yesterday}}}}

従来の連続循環移動による派生(1b)では移動により話題化要素が文頭位置に現れるのに対して，Box 理論による派生(1c)ではフェーズ先端に移動した Bill はボックスに入り（統語操作にとって不可視的となり），外部システムによって文頭位置で解釈・発音される．一方で，フェーズ内部で移動した要素は，着地点で統語操作に不可視的とはならないと想定されている．INFL 指定部（主語位置）への移動はフェーズ内部での移動となるため，主語位置の主語は統語操作にとって不可視的にはならない．

Chomsky (2021, in press) はまた，主語位置の特性として，(i) 主語位置の主語は存在前提をもつこと，(ii) 主語が argument of predication の意味役割を付与されることを主張した．(2)の there 構文の意味上の主語が存在前提を持たないのに対して，(3b)においては主語位置の主語が存在前提をもつことで，*a flaw* が意味的に不整合を来すため非文となると説明する．

(2)　a.　there is a fly in the bottle

b.　there is a flaw in the proof　(Chomsky (2021: 27))

(3)　a.　a fly is in the bottle

b.　*a flaw is in the proof　(Chomsky (2021: 27))

次節にて Chomsky (2021, in press) の主語位置の特性に関するそれぞれの主張について取り上げ，その問題点を指摘する．

2. Argument of Predication について

Chomsky (2021, in press) は INFL 指定部に移動した主語が ‘argument of predication’ の意味役割を付与されると主張する．しかし，主語と述部が Predication を意味しない場合がある．Guéron (1980: 653) は文の意味解釈には Predication と Presentation が存在すると主張する．Predication は，談話世界に存在することが前提されている個体・対象を主語が指すことを表し，述部が主語の特性を述べる意味解釈であり，Presentation は述語が談話世界に主語が現れることを述べる意味解釈である．それぞれの意味解釈は(4)の意味表示をもち，(4a)では主語が述語より高い位置で解釈され，(4b)では主語が述語より低い位置で解釈されると提案される：

(4)　a.　Predication

[[$_{DP}$ . . .] [$_{INFLP}$ INFL [. . . [$_{DP}$ . . .] . . .]]]

b.　Presentation

[$_{INFLP}$ INFL [. . . [$_{DP}$ . . .] . . .]]]

Guéron に従うと，表面上 INFL 指定部に移動している主語であっても，意味解釈上 Presentation 文となる場合がある：

(5)　a.　A man stood on the deck.　[Predication/Presentation]

b.　A man stood on the deck with green eyes.　[Presentation]

(Guéron (1980: 659-660))

以上より，INFL 指定部に移動した主語と述語とが常に Predication の解釈を持つ訳ではないといえる．

3. 主語の存在前提について

Chomsky (2021, in press) は INFL 指定部に移動した主語が存在前提を持つと主張する．これに対して本発表では主語の存在前提は INFL 指定部に起因するのではなく，主語が INFL より高い位置で解釈されることに起因すると主張する (cf. Diesing (1992), Ladusaw (1994))．また，(i) 主語が存在前提を持たない場合，(ii) 主語以外にも前置された要素が存在前提を持つ場合があることを示す．

第一に，主語が存在前提を持たない事例がある．前節で見た Guéron (1980)の Predication/Presentation 解釈の分析より，主語の解釈位置により主語の存在前提の有無に差がある：Predication 解釈は存在前提を持ち，Presentation 解釈は存在前提を持たない．(5a, b)はいずれも主語が主語位置に移動していながら，(5a)のみが存在前提を持ち得る：

(5) a. A man stood on the deck. [Predication/Presentation]
b. A man stood on the deck with green eyes. [Presentation]

第二に，Horn (1986) によると，前置された要素は主語に限らず存在前提を持ち得る：

(6) a. The president worships Zeus.
b. # Zeus$_i$, the president worships e$_i$/him$_i$ (Horn (1986: 169-170))

Horn は，(6)において，実在しないゼウスと，前置によって生じる存在前提とが整合しないため意味的に逸脱すると分析する．また，動詞の補部節の前置にも類似の観察を指摘している．(7)において，動詞が敘実動詞である場合は補部節の前置が可能である一方で，敘実動詞ではない場合は補部節の前置によって文法性が落ちる．

(7) That Salieri poisoned Mozart
a. I {know/recognize/admit/regret}. ［敘実動詞］
b. I {?believe/?claim/*say/*think/*reckon} ［非敘実動詞］
(Horn (1986: 175))

Horn は，敘実動詞は補部節が真であることを含意するため，前置によって得られる補部節が真であるという前提と整合する一方で，非敘実動詞は補部節が真であることを含意しないため，意味的な逸脱が生まれると分析している．

主語は INFL 指定部で解釈される場合，また話題句は典型的に CP 領域で解釈されることから，主語・話題句の存在前提はいずれも INFL より高い位置で解釈されることに起因すると考えられる．

4. 結語

本発表では，Chomsky (2021, in press) における主語の特性について，(i) 主語位置の主語は存在前提をもつという主張，(ii) 主語が argument of predication の意味役割を付与されるという主張を取り上げ，いずれも不正確であることを指摘した．具体的には，主語位置に移動した要素が常に存在前提を持つ訳ではないこと，また，主語位置に移動した主語と述部が常に Predication の解釈を持つ訳ではないことを指摘した．

参考文献

Chomsky, Noam (2021) “Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go,” *Gengo Kenkyu* (『言語研究』) 160, 1-41.

Chomsky, Noam (in press) “The Miracle Creed and SMT,” ms.

Diesing, Molly (1992) *Indefinite*, MIT Press, Cambridge, MA.

Guéron, Jacqueline (1980) “On the Syntax and Semantics of PP Extraposition,” *LI* 11, 637-678.

Horn, Lawrence R. (1986) “Presupposition, Theme and Variations”, *CLS 22: Papers from the Parasession on Pragmatics and Grammatical Theory*, ed. by A. M. Farley et al. 168-192.

Ladusaw, William (1994) “Thetic and Categorical, Stage and Individual, Weak and Strong,” Proceedings of SALT 4.

de Swart, Henriette (2004) “Topic, Focus and Presupposition,” Context-Dependence in the Analysis of Linguistic Meaning, ed. by Hans Kamp and Barbara H. Partee, 515-520, Brill.